

孝子善之亟感得傳下

^ 13  
3275  
2



繪入

卷之三 坐蔵下

13  
3275  
2

巻 5  
1344  
2

門 へ 13  
3275  
2

信州  
聖天宮  
流傳

孝子善之丞感得傳卷下

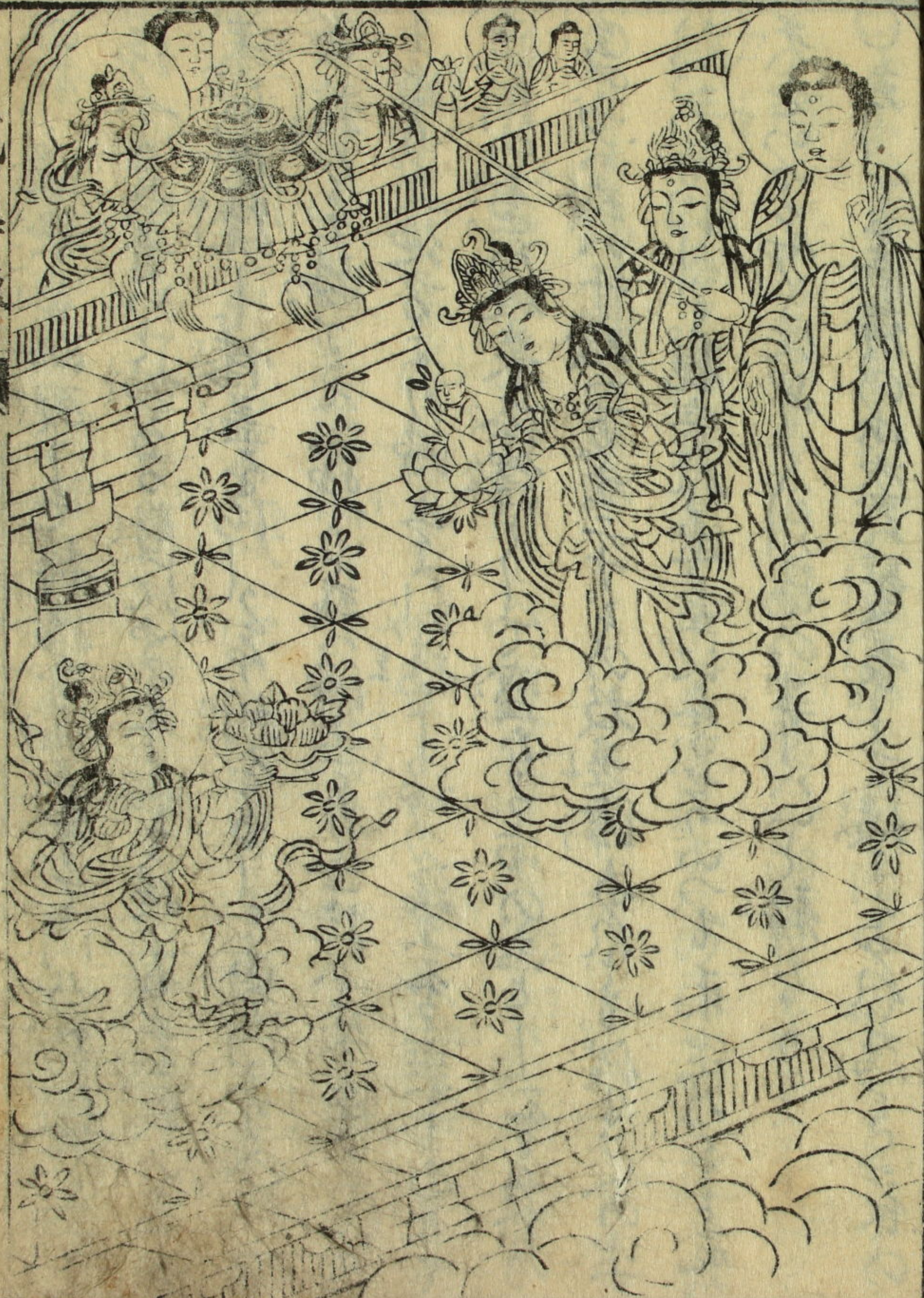
夫より善後がの錫杖しやくじょうより継ついでり連華れんげにふりて空乃方そらへ  
上うへの事。先小地獄せうぢごく下りゆより一倍いちばいふもよりとふれん。  
光りかやく金色こんしきの大山あり。虚空こくうより向むかひして光ある糸。  
者千筋せんしんもより下りけし山乃中やまのちゆう流りゅうより向むかひ將家しょうけ床とこに結むす正ただ  
る糸ありありて。各おのづか々づか其糸そのいとに取付とけねきハ糸自然いとと虚  
空そら縮ちぢりあがる。其門そのかどより或ハ糸いと向むかひ糸いとさけて落おちる者ありハ  
者ものらら糸いと希まれ生な流りゅうひて。其人そのひとを連れん臺たいにふせ。糸のふり星  
たゆみあり。糸の作つくり今糸切いまいとと落おちる者ハ。沙婆しゃ路ろと念  
佛ぶつをやるやるる。教しやく心しんふく。彼生極あ糸いとをいりやうとふ

老順次の仕生るもきりて。娑婆一泊し居る也。今蓮臺(あ)ふを  
を瑞ふ井いんれ観音菩薩(あ)也。世人の娑婆よくあつて。以後  
悪道(あ)に落ちたる事あり。今生目よは必死生法(あ)なるなり。

○井の錫杖よりむすくのやりしゆ。間もろく極楽浄土の寂極  
此門に到りぬ。此大門の扉よき井志づく呪文を唱(あ)ゆ。バ  
門をのほく同あるなり。は門志とくく金色にく。光りゆく  
事なむよふべき物を。それよりさけるらひ。又大門あり  
寂極の門よりし莊嚴結構(あ)なる事。通し勝まる。は門上りて  
廣大やして。人あがるふんそへんて。門の中段(あ)鉤欄(あ)乃上(あ)に。  
無数の井いんれに如意杖(あ)持し。けるがよ。娑婆の方入ん

かり待く経法(あ)の祥也。井此作よあれ。皆先をさうて。此生法を  
さるる不(あ)衆あり。今圖字同行(あ)の人。東連よあつて。此生を  
さるる也。悟びては。門をいで出迎(あ)信(あ)なりと。かくて。經(あ)る。阿蘇陀  
如来(あ)巍然(あ)として。無量の不(あ)衆も圍繞(あ)せられ。炎幢(あ)勝蓋を  
はしくさし。微妙(あ)の音樂(あ)演奏し。観音井蓮臺(あ)室(あ)に。此生を  
をさるる事あり。瑞ふ。その新生れ人の姿。三歳(あ)づりの初見(あ)の如く。  
ちど。水精(あ)の如く。因(あ)外(あ)す。此と。瑞ふ。いくさあるる形(あ)も。と。身  
を合(あ)を。観音の此方(あ)に向ひ。かき。後づきを。げ。こ。も。さ。る。も。  
此より。このふさき。祥。母の乳香(あ)も。演(あ)も。も。に。異(あ)なり。は。大  
門(あ)まで。は。川接(あ)乃。此よ。そ。わ。い。殊(あ)の外(あ)卑(あ)く。の。侍(あ)。は。瑞ふ。人。上。臺。を

慈母傳



月

の香衆歡喜踊躍して持歸る如意して門乃鉤欄を掛  
踏ふ。其音いと妙なる聲にやえし。と終より五枚の華如  
來法圍繞し。幡蓋を飾り列を成して東門より入路へ  
其粧ひを飾りて歸り。或は淨土より出路へ來連の香衆  
もあり。又地方より淨土より歸り。或は淨土より出路へ  
東門の香衆來絡繹として盛なる市の志とし。香衆乃  
多少ハ或ハ千。或ハ百。十。二十。その數差降あれども。往生人の姿  
いづれも同じく。觀音れ蓮臺に坐せり。いつも來連乃香衆ハ  
矢をいつとやくに早く。引接の井ハいと靜なり  
○善くして善善の由安ハ髮長して後よりなれ。乃香衆の夜の

いと炎一き波百重なりも着歸つる。下浦ぐまらぐまら  
と成りてる。その外七寶の櫻路令銀珠玉也身を飾る。  
端正珠妙なる事いとく。其中に十人の内二人ハ比丘  
の華も飾りし。あり

○井に臨みて第三の門は入れば。淨土乃極廣大なる色に  
て幾千万里も深る。其地の平らなる事大海の如く。光明  
四方に及ぶ。地の色瑠璃にして金輪際す。す此と成りては  
庭より或ハ炎一花。或ハ雲樂器などの類。自然と花  
り。白き雲とをる。射ハ地乃色も向く。其物と成りて地乃

色さぬぐに愛む。つがふ此新も地の色さぬぐらうり。或は  
宮教ふも移りて。教くはるるなり

○又金銀七寶にて造りたる宮殿樓閣あり。たかく  
櫻路華鬘寶鐸をどかれば。微風吹くもむらよ吹きまれば。  
多なる響き。その殿閣地上に立るもあり。虚空はゆる  
もあり。或は中ぞらに立るもあり。或は室中に飛ぶるも  
あり。其宮教乃教多くは五重七重の宝塔をみるふ似たり。そ  
の階釣欄を。珠玉成りて。莊嚴せる事言語は述べし。  
或は地上より虚空まで。宮教殿と連なり。立るもは  
其一は宮教の中におのく。陀羅尼音響至とを尋ね其

いしめて。元法し移りてふなり。或は音楽を奏し。或は法の  
飲食を備へ遊戯逍遙乃あり。興は述べらる

○或は無教の井。宮教よふて。虚空を飛行。或は宮  
教を先に立る。五色の雲にのりて徘徊し。移りもあり。又  
室中にた宮教あり。その内は井あり。て空深し。移り  
もるなり

○瑠璃地乃上は。金銀水晶をその色を以て。魚鱗の如く、  
敷るるをみる。その間より紫赤の如く。細く葉をたを  
む。また上は。つらく此葉は。き花降る。なき花は。涙を  
おひくる。あつしき花降るなり。道は金銀の繩を以

蜘蛛網の如く罪を分てり。糸の伸小女踏く入て  
 蓬華よりたらしを流し入。思ふにば柔にてくち  
 づる事四のすなり。そのかよきしりもくちを相けし。足を  
 わらぬその地もまればくはるなり。二思あゆじりあなり  
 一間経の円。おもしろ小異番意なるもの甚し。二思あゆち  
 へいげのたあへふ多れ善樂写あなり。糸室小女は地を十  
 思しも婦もをるへ。飾りのをよまふ念法を流く。思願し  
 るうたを忘るやしと。別引あげ流くも守。善と悪面白さ  
 の飾り。あげしむがとすとすぬのなる状。糸室を揚枝とて  
 思きよせし上流なり。ぬのこまや小女もくまなく。娑婆に  
 あり。くちもいひまをせく。吹末浄土の縁となし。共小念作  
 て極樂よれ生すべしとぞ仰る。又極樂よ八月月かしと  
 ついども。修正乃光明をて西千の月よりも明らうたり。又晝夜  
 の差別も外。降るも揚りもする花乃消る故に。一時く  
 をあつかりせ

○又高乃樹あり。大さ三里をうりたる也。其事より下に金  
 の網を流り。その網よ七葉の風鈴を千百万ともありありて。  
 風は隨くぬるるのぎむる千は音楽を二度奏するなり。  
 法の枝をてに衆宝在巖乃宮殿教もあはば立並なり。其中に  
 八佛并元満ちるなり。その宮教する宮殿へくはる間へ





后心佛

豪華はくろりて橋を架す。香を散らしをけり。橋は言の  
 妙なる雲か。枝よ色々の花咲く。花おとに受く。枝よ  
 ちりてはなれり。風吹渡りぬれぬ。淑妙なる妙か。枝よふとに  
 いはれり。葉あり。風よ通く。又音楽のひびきあり。貴樹の  
 上には金色の雲おほいなりて。其上の隅りんく。廣く。さうは貴  
 樹香千万とあり。極樂界中に徧満せり。貴樹も宮殿も  
 莊嚴美を流りて。光く。まきす。紀とゆりて。互小相映に  
 いはれ。までも得あくる。ゆりぬ  
 ○又色々の化鳥あり。頭は天人のおく。さるもあり。其多和雅  
 やして高。極樂界中も同也。一やとそ。其妙の面。向こ

言よ述べ。く。た。あ。い。い。年。遊。時。も。あり。孔雀鷲鷲あり。其  
 羽金銀珠玉にく。あ。ど。る。が。あり。羽乃間より淑妙の法音流  
 り。せり。又教ある花を盛て。唱し。翔り。年よもあり  
 ○又大なる貴池あり。廣くして遠際なし。池の汀に銀七葉を  
 もつ。莊嚴せり。池中に青黄赤白種々の蓮花咲み。ど  
 れ。を。の。く。その。色。は。随く。又其光あり。其中花よ上中下  
 の品。つ。流。り。上品乃花は白色にして。徑一里。流。よ。ん。く。り。  
 中品の花は紫色にして。上品花より少し小なり。下品の  
 花は大方つ。や。く。ち。に。ん。く。り。其。此。神。姿。も。身。相。光。明。も。上  
 品。中。品。より。勝。き。中。品。下。品。より。も。殊。小。勝。き。て。ん。じ。

下界の花よりなせたりくもあり。枯るもみざるも有り。其の作は。要婆とて終勇極は念佛相續する者の蓮花  
に肥るももちて色鮮也。或は信心篤固して念佛たごりぬ  
れ。花よりけ衰へ或は枯る也。汝も先は衆人取替る  
空中の糸いじ池乃蓮花の糸なり。誰にも信心堅固に念  
佛相續して。花乃肥育長やうみまきありや。

○寶池のほとりに一人此井あり。宛轉するげき悶え給ふ。其前  
に弥陀如来觀音勢至立給たり。後よあまは衆を衆の井の  
作よあの体して嘆き給ふ。井の初もく往生せし人なり。其の  
井此母も先は往生して淨土にあり。佛為よ母此井歌を

示して。井に對面せしり給ふ。わが身は生せしれはるは  
母まぞの。生生滅滅とらと。歡喜乃泪を流し。身はを死に  
る。死を憶ひ給ふなり。佛の油の下をえんと。室にいひ  
ん。くば。實も四十は。此婦人合掌してまき家あり。けし  
て給ふ。女人の姿もく。其外に二向女人ありし。

○又縱廣三里。石よえゆる大山あり。山よ寶樹あり。雜色  
の花咲みたり。寶樓宮殿ありて其山頂より。のこみ。を教の  
井。遊戯道遙。流る有。或は此山空中に飛ねる。時も  
又寶池乃水。自然とさるのりりて山に。或は宮殿の  
なり。又八樹上よは。こいて流る。寶池は。色は。持く乃

炎城砂として敷滿の令穢際まです紀とをりてく白氷  
を小炎此處あり。其形蓋し似たり。寫教感よとくた  
りしらく地なる也

○あましくれを衆かの下品乃蓮花枯志をくくる炎池の  
をくりに立るび。合堂弄て頻に泣き悲しき路に氣を也  
たり。其此作よおの先に立路よ觀音勢至たり。後乃  
華蓮の先よ生せる念佛の同ゆるり。海峽にあり同  
ゆ人信心もこの念佛たてれば池中に蓮花枯志をむゆふ  
かくの志とくちげき忠しき路よりあり。かくあましくの志を  
るき忠しき路よ対極樂の光明も曇りし路にあり  
音樂のひき。徒るれさばり波乃音風の音までも一時止  
る寂然としる。唯を衆のるげき路よ勢至のうにく。其あた  
れよをふたれたるいをん方れ。觀音勢至志ば一の記。觀志し  
路よ禱ゆるり。三華乃出口より雲のゆるるれ物出る。  
池中入枯萎する花をく綿をく包くくくる志とくをま介  
ぬまに。不思後や其花忽ちいきあぐる。色あぶるふぬ後と  
れを名歡喜踊躍し路よるの事。け時や東のいよはるかに  
あさりて。その不鐘乃勢至あつて殊勝れいさきあつて  
より樂音鳥勢至のらく此音のいさきく懸るしあり  
あり



○又寶池の中に金色乃船あり。其船大さ二里ばかりも  
 あり。中へえゆ。船乃内より宮殿あり。ありて。いづれもこのまじ  
 まし。て説法一語あり。觀音智至徳の音を成。音如法表として  
 新生の人をそとさし給ふ。又又。一ま。船よ香花衣服を説く  
 来りて。宮殿の前よ。並に花あり。或ハ華鬘のやうなる  
 物よ。移くの妙花をへり。少く持し。虚空を飛り。一ありて。  
 又宮殿よ。續て並給ふ。あり。并の作よ。され。他方の并れあり  
 て。阿彌陀如来を供奉。一給ふ。此并を。奉養。念佛を以  
 せむ。餘の并を併し。給ふ。如來直の法説法を。使ひ。ま。あ。ふ  
 る。叶を。し。あ。觀音は説法を。因て。轉給ふ。念佛の。法。音ハ  
 直に。殊。隨。言の。説法を。使ひ。ま。あ。色。條の。淨土ハ。障あり。極  
 樂淨土ハ。一切。障なし。と。も。室の。く。又。上品。性。生れ。并ハ。如來。法。空  
 の。説法を。因。下品の。并ハ。寶池の。波。音に。く。説法を。ゆ。也。也。  
 ○又上品と中品との間よ。樂なる。草ありて。花咲ふ。ふ。草  
 池木乃波。舟ゆ。給て。志あり。上なる。葉に。并。並。あり。と。ふ。  
 波よ。障なく。あり。あり。あり。草乃。根。より。金色。花。を  
 散り。され。光。四方に。く。く。想。して。波。乃。う。つ。時ハ。衆。衆。を。集  
 め。如く。して。虚空よ。音。あり。其。波の。回。色。この。妙。花。と  
 び。ま。る。説。考。こ。めて。ま。あ。ち。に。ま。あ。に。の。る。其。面。白。く。い。ふ。は  
 ○又。中品。乃。池の。な。り。を。八。人の。并。遊。給。し。給。あり。其。中。に。こ

華蓮ふ先にまゝみ移ふ。只今はく某が蓮花生せりと。高  
度なるまを。研るる五人の華。面々に筆を擲く。書きたる  
信ふ。華の作り。あれハ大華也。要緊に念佛の行若ありて  
蓮花生じれば。あれを志れしとわ結ぶるなりと

○ばのみさる蓮花の内より。光羽出。あれ。被る者勢至ありこ  
の華。俱にまゝ結いて。其花より向ひて。說法し結ふ。花一葉で  
同なり。其二葉乃内おも。較多の性生人あり。秋三歳をうり乃  
幼児乃わし。其身水晶のおとく。いとまよるる。合掌し。麗き  
居たり。花開きたりて。観音華。如意。故に。池水を汲んと  
志望へ。おまゝい。まゝ。水い。く。く。出る。お。其水。お。れ。お。く。に

を舞わたりて。如き。れ。よ。よ。なる。其水を。く。別花開。新生の  
頂上。灌を。流く。を。買回。め。ま。り。て。白毫。相。と。なる。ま。れ  
より。新生。れ。人。通。方。自。在。し。て。虚。空。に。飛。行。し。或。ハ。妙。花。ふ  
る。く。り。て。遍。く。衆。れ。よ。教。し。妓。樂。の。声。炎。鳥。の。鳴。り。  
之。量。の。伎。樂。言。語。よ。述。ぶ。る。人

○中品のおとりや。おぼしき。お。み。教。十。人。れ。華。啼。泣。し。流。ふ。あり。  
長。く。延。回。なる。わ。く。伎。樂。さ。い。ま。り。る。き。お。よ。何。の。お。如。意。れ。華  
あり。て。歎。き。あ。ふ。中。と。華。の。作。り。あ。れ。ハ。新。生。の。身。衆。なる。あ  
ま。り。に。つ。が。身。の。容。色。微。妙。なる。故。見。て。身。を。く。も。小。融。淡。し。て。教  
喜。啼。泣。し。流。ふ。あり。と。又。け。井。地。よ。培。る。る。地。よ。死。と。成。り。せ







果しは。如来の御手、當麻婆相中、臺乃、御相よ、  
る由、佛身、此、長、富士山、百、む、りも、合、せ、る、りも、  
廣大、あ、る、結、了、り。如来と二大士との間、凡、二里、斗、も、隔、る、  
や、う、に、そ、ん、と、ぞ

○淨土の勝相、あ、ま、く、拜、せ、し、中、に、ま、ま、と、貴、く、そ、ん、  
へ、上、只、中、其、ま、に。如来、此、息、雲、入、り、か、く、る、が、金、色、此、光、  
明、と、ぬ、其、あ、つ、ま、る、ま、と、大、る、る、事、山、の、か、し、その、光、り、争、く、奉、  
喻、へ、き、物、あ、し、け、此、息、の、光、此、内、糸、箱、の、か、く、る、る、光明、十、  
方、より、雨、の、降、り、も、志、あ、く、花、来、く、如来、の、此、息、此、光、  
の内、納、り、ぬ、け、時、若、し、巫、ぬ、も、ん、事、あ、り、光、明、く、ま、り、  
け、ま、い、希、室、あ、り、汝、知、ら、ば、し、ま、れ、い、光明、と、て、外、婦、命、  
と、し、物、あ、り、汝、け、事、汝、く、そ、ん、と、妙、安、婆、よ、ゆ、り、人、も、終、  
つ、ま、ま、だ、し、や、ち、う、く、る、連、く、ん、せ、結、了、し、不、思、議、の、十、方、より、  
来、る、細、き、光、の内、よ、整、あ、り、て、南、無、阿、弥、陀、佛、助、後、く、と、  
は、の、り、り、細、き、如来、の、此、息、乃、光、明、の内、中、も、又、声、あ、り、て、  
た、ま、け、ず、つ、つ、と、宣、了、り。其、此、夢、一、息、く、に、光明、池、水、を、ま、け、  
て、花、来、り、光、り、あ、り、柳、中、く、貴、く、と、し、も、殊、也、佛、の、息、声、  
此、光、り、安、婆、の、念、仏、の、整、れ、光、と、念、い、ぬ、る、付、別、光、虚、堂、へ、  
花、あ、り、息、整、ら、ぬ、乃、蓮、花、と、ぬ、く、極、樂、界、中、に、佛、法、  
を、時、は、結、の、希、室、の、花、を、と、り、て、此、形、よ、あ、り、一、念、と、念、と、結、了、

あまき色花をとりて念下後下花に皆就  
音大士の念身なり。あの念教乃蓮花に皆安波にくくる  
智修の念仏なる者乃蓮花なり。観音あはれおとく如来の  
方へ向いけ花を大切の護念し。げん念仏の信退持あり。お  
極いとせ強し。祈禱し終ふなり。其人降終乃時へ花  
迎いにあつらひてそのこまひたる。観音花散りて頼  
あてを信ふ時。天冠乃瓔珞花にあつらひて唱る。音れたも  
しうらりし事。言に述ぐごとくなり

○極樂のそらとを仰ぎ見れば。虚空一といふいふに  
大蓮花一輪ありて下れ方へ向なり。赤色に輝て赤光り  
けり。花中やどりよりつら終るやうにらん。其内よひり  
の莽下れ方をたぬ。岳路あり。げん時ありて動揺する  
やうにらん

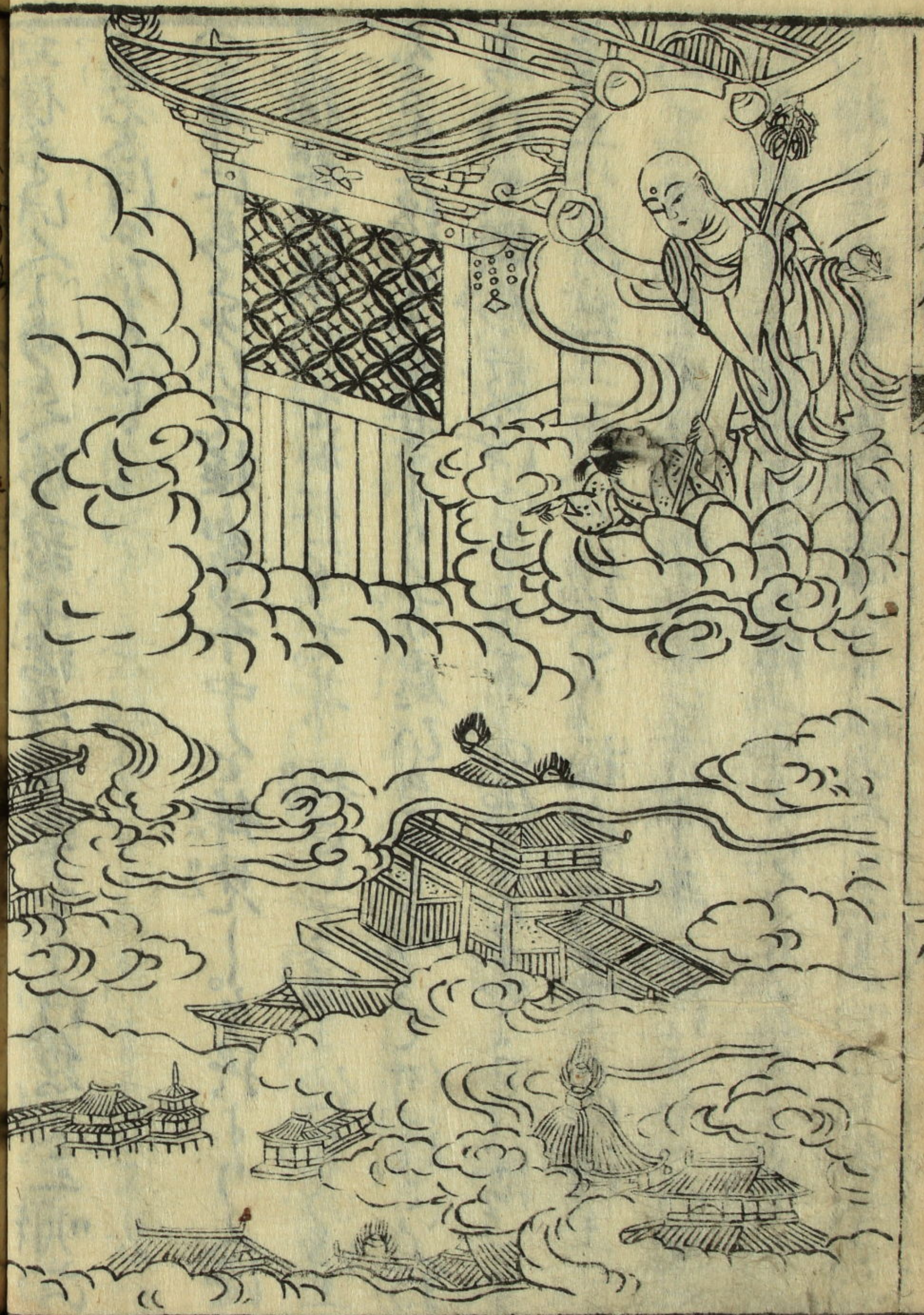
○或下よいの二歳なりけし。兒の歌して。色向く笑しきふ  
念堂。一跪つき。居る石へ教多れ。莽きよげある。跡よ  
菓子の敷をのれ持来りて。其前よ妙き。其子の頂を  
撫を念にありて。汝念佛して。よくいふ。来りて  
いとわいらしく。ち終り。かくのまどく。おまは花を  
来り。後嘆愛敬して。終へ。終り。終り。菓子の敷  
幾千万とあり。積並べたり。莽の仰よ。あの徳は衆

十方の淨土より來りて。新生の人をめぐらさめ給ふありと  
 ○又娑婆にて。香華を供事す。念佛を勤ふ者の聲。  
 金色の蓮花と成て。虚空より降く。其の花を奉  
 じ。異香薫じ。侍奉甚しく。光明くやなり。教多の  
 華け花く。余後ども。蓮華次第に廣く成く。多衆を入  
 る不礙す。華の作し。花よ。余後小華を生。教護した  
 まし。此人早く往生路をばす。におまこと。侍遠小地不  
 きたりや

○又華の作し。娑婆にて。念仏をす。め往生志ある者ハ。  
 光明の中。此の量の  
 功德をけく。あく。諸乃。伎樂をうけ。忽く。三明六  
 通を授けたりや

○華に志く。ひて。極樂界中を拜見す。終より。又往  
 て。極樂北東門をかたりて。華。揚して。通。他方の淨土  
 をえ。終より。極樂より。方處ひ。さる。て。何。教  
 あれ。微妙。嚴淨の土也。華の作。する。は。り。る  
 淨土。その。教二百八十億あり。極樂乃。華の淨土へ  
 行て。佛土をえ。臨。間も。娑婆。北。千年を。終。る。の。回也。  
 いた。や。多。くの。佛土をえ。終。る。と。い。は。り。志。す。べしや

○極樂の華を。結。攝。する。法の。大。さ。三。里。不。も。有。き。不。



法の供養物を華鬘るとふりて。宗あり。後あり。又  
 同く空を飛行してお路あり。并の作よ。これ極  
 樂の衆。他方の法佛を供養せん。為よ。後あり。又  
 ○又極樂より。遙小下にあたりて。世界あり。佛あり。路あり。  
 并を。極樂の衆より。清長もいさく。萬物の莊嚴  
 もおとれり。并乃作よ。これ遠地あり。又。下  
 此方に。南あり。て世界あり。是にも佛あり。路あり。  
 此并の長も。万物乃莊嚴も。又。地より。次あり。  
 并を。此地より。極樂に光明へ。より。出る  
 と。て。一。此國乃光明の地より。出く。ひく。も。落。樂



器も手はくろくちをくし信ふとらん也。希の作よらん  
懈慢國ありと

○ろ終より。希にほく矢を射たぶとく。ろろの下  
のち下海とそくの島もあくる勝幸村の観音堂  
よるりなき。日わーをらんればちさざりあり。十二可乃  
幾より十二日此晚京まで。其間一日一夜の事あれは。  
善く至公中よ。一年半後も終一やうにそんしとぞ。  
あまりにそつうく存。就喜の事若くもぬれ。まより  
我爲へ帰山つらもより運きとぞ。舟半途まで運よかゆ人。  
つまでち海電つとつ。何とてたさうつらとと。るれ

よけて。辰く拜見せ。事ども語り。自比とらり。物いひも殊の  
外に存候。物いひもく成。親共も自分にも不思後  
不存。具一感見の事た結一に。又昔四多大き小敷懸  
をた。地獄とて我を火地車に繋せらるとの事。高取  
もる。信りありとて信せむ。あまよと悪口放言。一たり。志  
のち抑しも。昔四多素法業。一居たりしが。其素端向  
自在とて物よりたつれて。そのほろ梁の上とて。海あがり。  
ま倒。燵中人。落火を打消。一たり。昔四多まもの。そのり  
此恠。是故んく。大まふ地とらき。やうて。表かけお井。此  
まで垢離をとら。とらる。よて。内よ入。南ぞ地。若く大希

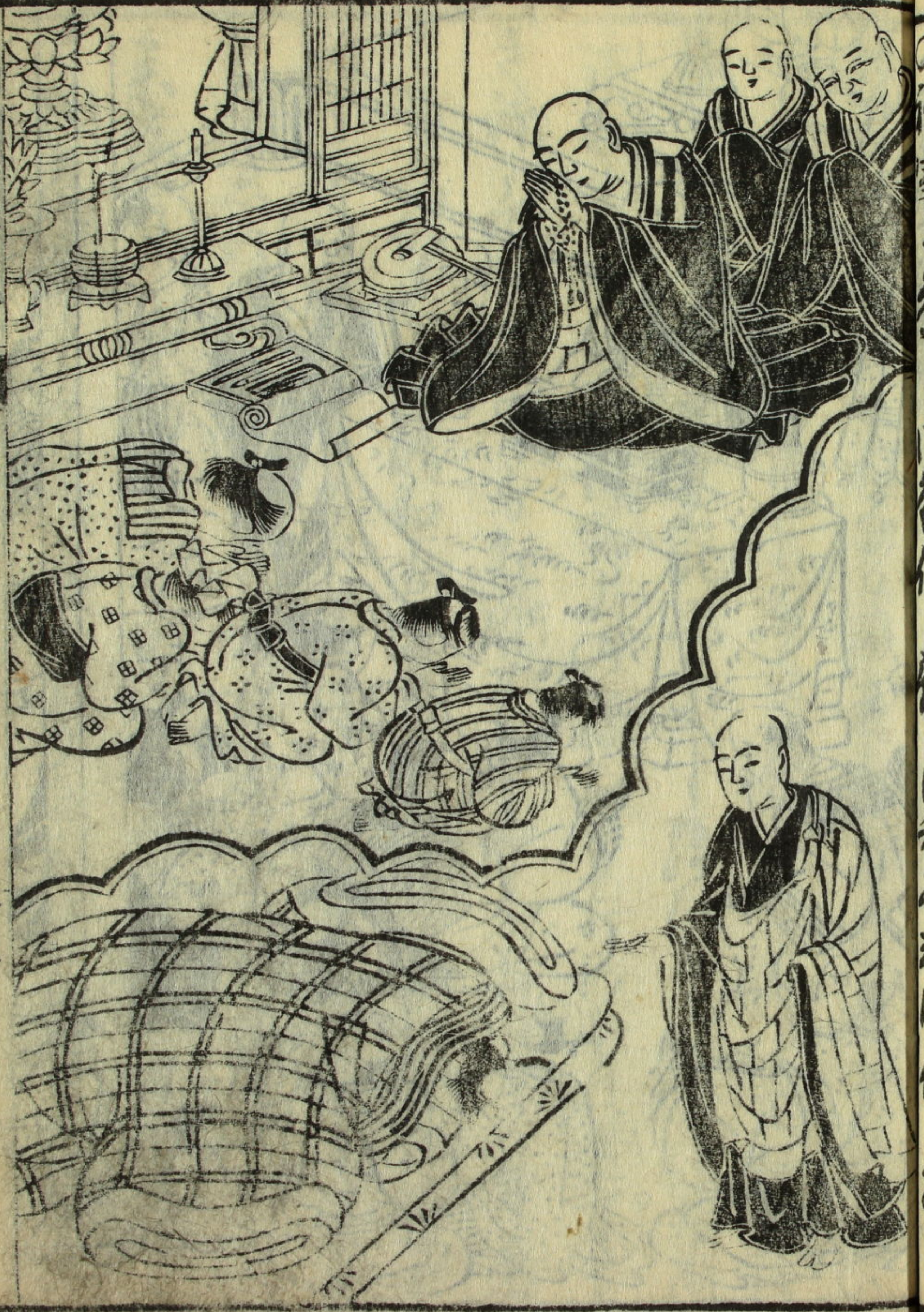


只今の類公乃科をゆるさせ給へとて。手改命を。一公  
 懺悔してぞり。う獲より後若四身ふりく信公起し。を  
 能和尚。右の次身をやりと。自身も日課二万遍を  
 受し。推きて酒肉五辛情を相止し。母并に身深を  
 脚も。同ドく日課一万五千教を授ふ。若四身いよく  
 信心堅固し。一公み念佛せしうべし。半年も過り  
 肉。癩病あしぐ。多岐復せり。そのちを能和尚  
 こそ。勅化し。流し。若四身も多岐復せり。一公  
 和者多危のよとて。毎分及。若四身事。法人。一公  
 られ。念佛の力に。要病かくれ。若四身。一公



とて。其後をえせし。示し後いなる。志るるふは徳和尙  
 示寂の後より。若くは信を退却し。罪深し初めも  
 肉辛憎愛の執縛も破り。以て現得し。又亦在る。再後い  
 執し。其跡さもお奇。又見らり。山とも。公中にうけ  
 ぐ。氣色もみく。むい。免角罪悪深重のいこと。な  
 とくれく。信り

○若くは。八幡宮へ。丑の時系り。け下め。る。夜より。之を  
 祈へ。毎夜系詣。二十二夜。あうて。地蔵菩薩の。水引等  
 にく。地獄極樂を。歴観せり。その後い。度く。之徳和尙  
 の。禪室より。あり。お。初化し。於。此。和。為。或。時。作。り。終。り。へ。





汝ハ千古にも例されるもの。感應を蒙りし者なれば。ついで  
 八判發條はつぱんはつじょう夜よの身みとあり。一ひと念ねん佛ぶつして。極樂往  
 生じやうじやうを彰あきす。一ひと念ねん比ひ小示せうし一ひと臨りんい。然しかるに。和尙  
 示し寂じやく一ひと臨りんい。ば。野山のやまの縁ゆかりをも。おけられ。途ち方かたな  
 き。禱いたして。一ひとあるづも。お祈いのて。食じき事じをも。後ごある。年とし度ど  
 ころあり。仍なほく。至いた能に和尙わしやう。爰こゝに。現あらは。し。有あり。記しる。を。た  
 折をく。示し一ひと臨りんい。る。と。ぞ。享保七年きやうほ七ねん。寅とら極きよく月げつ朔しやくは。此こゝ夜よ  
 一ひと人ひと志こころれ。を。裸はだかを。さ。し。て。雪ゆき踏ふ分ぶんて。和尙わしやうの。水みづ廟みやう祈いのへ  
 糸いと結むすせ。一ひとが。伊い志し漫まんつ。と。中なかの。足あしを。た。か。ひ。一ひと涙なみだを。流ながし  
 て。誓ちかり。感かん一ひとを。承うけり。或ある夜よの。夢ゆめよ。至いた能に和尙わしやう。を。来きり。の。い

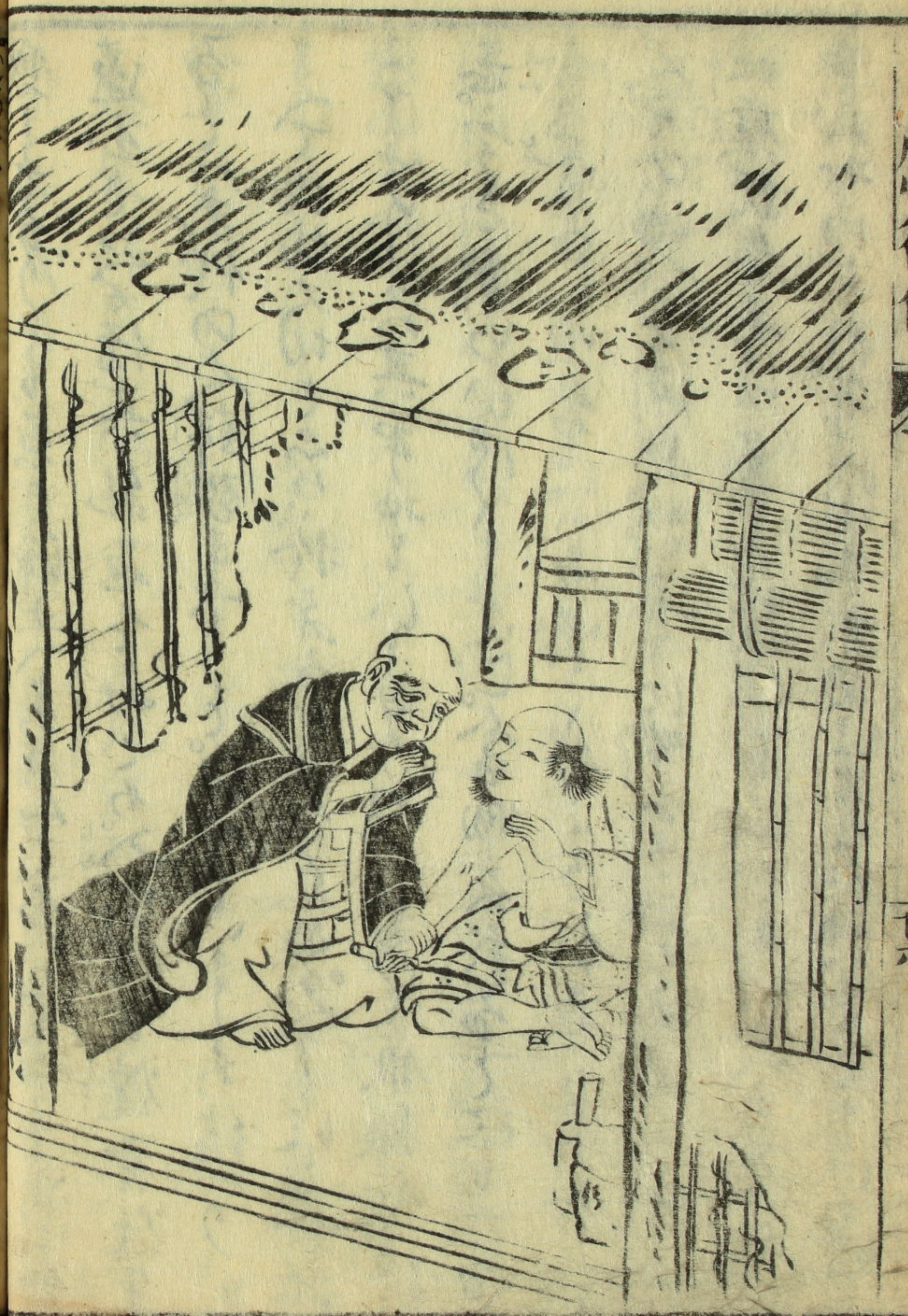
て。汝孝行此志深切なるゆゑに我を感下地獄極楽  
 を見せしも皆わづらひ不なり。我は是極楽上品の地蔵を  
 利けし事を能く必ず業を記す候らし世にあらじ。死に生か海を渡りても。  
 濁ろく世の凡ふ夫ふ乃な聖せいいん駄だ飲えんのからまじく。念佛にぶつ往生にやうじやうに疑ぎ  
 を記せまし者もの少すくくにたらしたれば極ごく楽らく。女に地ぢ獄じやく極ごく楽らく派はい  
 見みせしわら。その魂たま見けんの物もの終しまりしゆうじく。法ほふ人にんの信しんをた  
 こころにめめ。海うみ底そこの奉ほう懐くわいをまんと思しふ善ぜん巧かうなり。法ほふ  
 の契けいを同どうじきに極ごく楽らく此こゝ音おん楽らくと思ふを一いつ衆しゆ人にんあらじ  
 きりて念佛にぶつするときに。吾われらは此こゝ來き迎むかへしりしゆうじく。常じやう  
 に西方さいほう不ふ向かうじく。念佛にぶつする事を要なり。行ぎやう位い中ちゆう臥ふし



を瑞せざむといへども。折くハ威儀をさうのて。稱名ハ救通  
張らげじべーや。教ハさあつ。

○前方觀音堂通夜の節。ふく信いハ女壯の事ゆら  
しそ折くさいかせ。或疾友中じがの女壯のつれ  
信いて。汝信心堅固ハ念佛して極樂ハ來れ彼土とて  
對面さぐ。それハ實の女人ハはあはれとて。就者ハ娑  
とわつれ。いふりを放く飛去信ハそれよりこの女性  
此事不通よふい絶さうと我

○極樂拜兜の後さや。おれ從結攝る極樂ハあ  
は。うふ家同ハき娑婆ハ遮面せし事ハ善あり。捨  
血してありとも。煮き淨土ハあんと。ふいまわハ折さ  
蓮公といふ僧。其氣色をみとわ。入水往生。燒身往生  
るどハ未代の人軒政さぐ。祖師もいす。あ絶つり。か  
まて後生大切とふり。捨身をどゆわくわさぐ。念法  
ハ中さぐ。其事ゆい。又善く厭穢飲淨の  
志。さぐ事ゆい。念法ハ念物衣敷るどにも。一向  
貪著さし。唯常にハお嘆く。念法ハ念色をよりお。念  
人そのゆ人を同ハ。念法ハ念味さき。捨を念ても。淨土の  
莊嚴。觀音并の有さ。念娑婆を思いか。念法ハ念娑婆ハ  
事ハおけられ。并ハ念面。念目ハ念を念れ。念法ハ念時



獨言ふやいハ世の人ハ何ガ世ハ面白キ事ありて台  
 しくむらや唯飲含ばりハ能と公得くくくくくくくく  
 けぶやきりる

○地獄極楽感見の後ハ片時ひとときも早く判發は度念執  
 してゆへも。親貧窮ト朝夕あさゆふはいとをい減へりさきを見  
 捨すてて。又親も許ゆるしむるべし。にて念佛たこ  
 きまづつとわつ指ささるが。佛茶の信者しんしやを能よ和尚じやう受うけ  
 も変かへく示現しげんして。出家しゅけをす。わ能よいしゆ。あるがらに  
 父母ふぼハ彩さいいハ處ちよし。親もあつたるる。冥みやう愛あいの若わかりて  
 法ほふり。出家しゅけを許ゆるし。な。仍なほと素折すせつ大安寺たいあんじ。相あひまりて

判發し。は名直化と号し。お家後いふく。不方も過難  
る成り。了らば事たもよく圓えたり

○或時秘州安西の性生記乃月。極樂を繪する。不を  
拜見し。ぬもくは宮殿。三雲のかりり。るていたるがう  
よく似やいとそ。ばくくや詠わ居りし。俄く大勢あけ  
てとつと啼出。右の書物を取。よわく。身のふく。て依  
きり。居合。るものた。おらき。蒲團。おらもて。夜せぬ  
は。小児をどの。ちき。孫入。い。た。お。く。づ。つ。と。あ。く。夜。か  
が。後。厭。求。よ。向。い。先。よ。は。あ。ま。り。有。く。た。物。入。て。極  
樂の事り。を。れ。ご。ご。ご。と。う。み。ご。じ。進。く。け。つ。さ。ん。ご。の。笑

つれいづんも。面目る。一と。夜。中。ける。あ。う。れ。事。な。り。に。と。  
あ。う。れ。人。も。つ。つ。り。ぬ。く。い。何。も。に。よ。ら。ば。安。婆。よ  
を。成。ど。り。わ。さ。ま。風。情。よ。て。い

○或夕ぐれ。庵室。よ。て。わ。り。を。詠。わ。居。く。頻。よ。落。涙  
せ。ゆ。何。事。を。な。か。て。と。思。ひ。六。地。獄。を。修。羅。屋  
を。通。り。え。や。せ。し。時。ど。ろ。ろ。れ。谷。を。よ。て。罪。人。た。の。な。さ。く。外  
む。髪。か。ま。ら。に。ゆ。く。ゆ。が。今。お。も。て。に。あ。ま。この。蚊。集。り。て。あ。く  
怒。さ。を。が。う。こ。も。折。の。め。を。れ。さ。さ。ひ。出。く。悲。い。ご。じ。と。て。  
月。も。あ。く。と。啼。や。い。かく。折。よ。つ。れて。地。獄。極。樂。の。事。も。も  
な。か。し。狀。候。の。公。面。よ。あ。う。つ。れ。ゆ。さ。な。く。か。り。ま。



○或云く、當麻曼陀羅を拜ませしに、女は泣くも  
 八。ぬも是は極樂にゆく似たる事あるまじとて、頻りに感  
 涙をなげしに、はた相見よつといふ。あれまで申さるるに  
 嚴もも心いかに。ゆわく申せし事多くい

前方を神宮の作し。汝定命六十二歳ありと宣ひ  
 う。極楽存見の後、片時も早く往生候ふて、朝  
 り佛へも。何事壽命をちり給ひて。早く往生候  
 させ候へと祈念しつゝい。少の病氣も、いば夜に生  
 かと悦中ぬ。ぬといひ多うれく申さるる病候ありと。性  
 せしと云ふに、幸聖ありと。ろの掛りい切に風情



外にあつて、何れも  
 かくのごとく。常に厭穢  
 ば。はいよ元文二己  
 田村乃多室よて。教日  
 之佛を初終し。二月  
 の素懐は逐く々漸と  
 如違

厭求中ゆ。相馬興仁  
 門下の徒長老。府内  
 後ありて。一と上来  
 此中を聴聞ありて。



考む。末代ふも及ぶに為れぬ。其口鏡のまじ具あり  
 筆記をたしと命じ給ふ間。府下の法侍志ありて  
 集りて。相共ニ集録する。不上来の如し。直徑の  
 へ地獄のありさる。極楽乃律相。中く海峽より  
 とよき物あり。言信も及中され。まづ十分も終日  
 由りぬ。直徑も拙僧も。卒よるも不學愚昧の身に  
 治意。人路りし人。中推思あり。虚言を以て  
 加添仕るる事へ。与人拙を以て中上する。如を  
 世度記録して指す。條々。虚妄を實乃後を善加。如  
 又上下控渡世誑惑の公を以て書記。中推志

前來不修の日課念佛立處。失却。現世よてい  
 佛神の尚罰を蒙り極悪乃重病を蒙り。未  
 へ地獄極火の危に落し中へく。以依。如くハ大恩  
 教主釋迦如来西方教主弥陀善逝十方恒沙  
 諸佛觀音勢至地藏菩薩佛は守護法天善神  
 ハ幡大菩薩當所鎮守妙見大菩薩日守中  
 大小神祇哀愍洞交知見護明。臨く後代此  
 録披見。如象中陳疑生信。志。如謹て推。如  
 如件

筆記者仰々願求教白

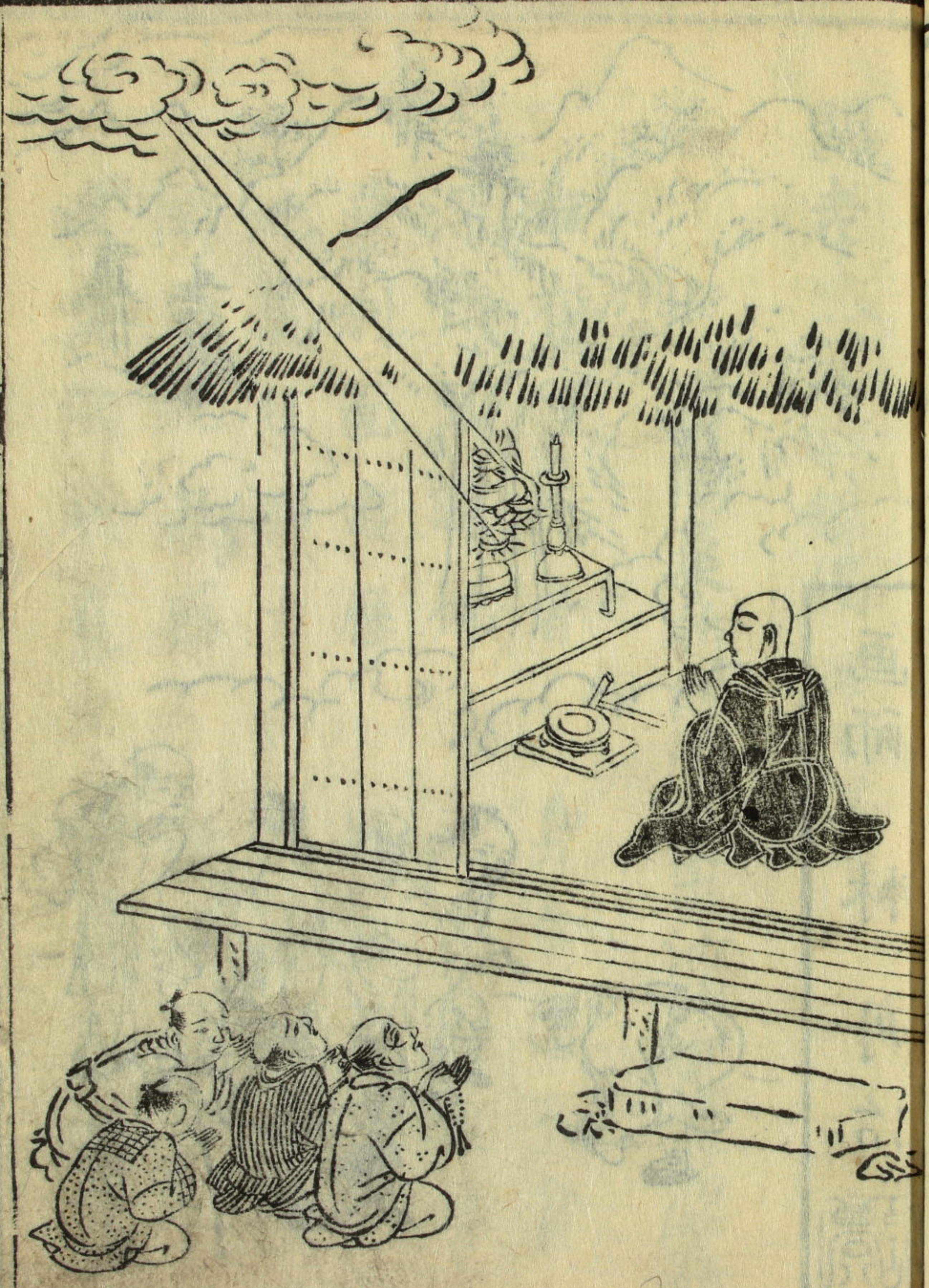
三洲多諸の間佛神此感應種々乃恠異殊  
 觀音堂通教の節感見志地獄の可責淨土  
 如莊嚴等少も偽空言を加へ申候  
 一切法佛菩薩地藏大士日本國中神祇冥道  
 之淨罪を蒙り八萬地獄へ墜可申候仍誓言  
 如件

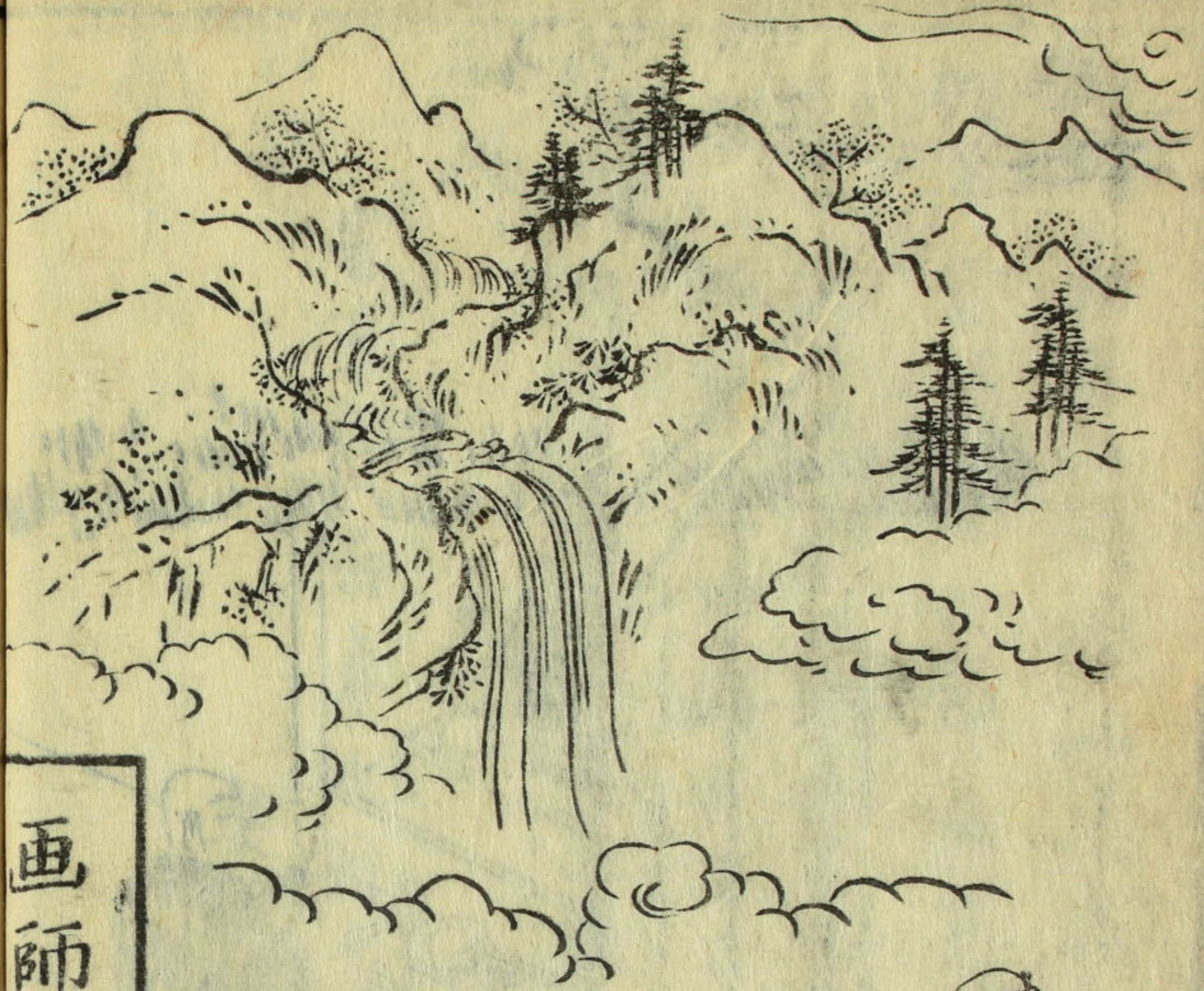
昔享保八卯年九月十四日

奥州伊達郡南羊田村

行年二十三歳

直往教白





画師 林丹治



閱孝感冥祥錄偈 有引畧之

奧陽柔折臨濟正宗沙門定龍活雲稿

希有	往行者	身貧	志不貧
深信	宜感佛	至孝	得通神
蓮刹	面遊歷	鐵城	苦照巡
地藏	悲願力	其德	實難伸
聞見	絕疑惑	讚頌	勸誘人
共生	欣厭意	同會	審池濱

又 東叡山凌雲院前大僧正實觀

地獄を親へ見れば僧獲比丘の現に巡り例に  
おとほ浄土知ぶる存せし河雷齋主乃  
差し慈ひし孫に由されり世の時いそぎ  
はかたきまきでし女の急と異にして聖女を  
志しし志深りし馬蹄婦乃孫に同しまき  
了知りし孝へきる百行の先のくわん  
善は奉くる事を見ゆる若深く伝ふ  
孝子善之丞感得傳卷下終

伊呂波和漢

無能和尚作

- 一 心帰命阿弥陀佛
- 二 世安樂の海松を乾
- 三 心具足の修り若ハ
- 三 世安樂の海松を乾
- 四 生兼惠れ身を捨て
- 五 妙伎樂忠誠をけ
- 六 通云得の徳故多
- 七 寶莊者微妙の國
- 八 功德の令池中
- 九 品蓮花乃よは飛
- 十 地の形は成結を
- いさより形ん極楽へ
- るく及臨廻八魔鬼郷

はやくたのめ慈みみ淨法  
 はたえよらん及もなし  
 こゝろを清きをまろく  
 りやくうを現法をれハ  
 るの日思款おこたは  
 めが身こもれ乃罪念を  
 よにあえたてしゆちひ  
 ねんげ乃くよ化生しそ

にぞ乃留れ迷ひ子を  
 へんばらさういハ遠をれど  
 ちうけちおき後あり  
 ぬるまもん志はまにけ  
 を死ふ一息活し勵む  
 加ふに救ひこそんそ  
 たのあをまぐに後のせハ  
 了のま無生此理を信り

つ孫よ見佛す法一  
 ながく不返乃位をえ  
 むちあう善提よそく  
 わ法蓮の布し生ても  
 たそれおのき憂悩あて  
 やよふくあく入あとに  
 けうにかしこれるをさ  
 このたい生死を離れすハ

ぬけく佛乃増進を  
 らくいおまめく王法く  
 うわ乃すくはあをれ  
 のどひさあ法教をせし  
 くわし業にふせまら  
 まんに増進をまをきて  
 けさあたなる増進あり  
 ぬくまのり城が法をそ

成心傳

三十一

て何をもををををを  
 さだめあき世の習い  
 ゆめとなり流あれさハ  
 みはくろ老なき理りを  
 悪きなきいををを  
 もま日暮れ穢のそ  
 すみらけて生れな  
 南無阿弥随佛

あすをねてたあさる  
 まのまへ一人はは  
 めよえら衆はまなさ  
 しはくにあい今よりハ  
 ひづよ修行乃功をば  
 せの胎もいそげ息た  
 系九重乃花の甚ま

山聖何稱海佛

津去の家門いらる  
 ちや又百年も過ぬ  
 りかた流海といろく  
 救通とくげじんも  
 けいこくひくぼれ  
 先帝とくをの海

園光大師の誠度  
 郡のつづまれあ  
 西と糸がし稱名  
 ひみく月目とち  
 業乃秤のかり  
 ふうきほひそく

かゝる流流のよきかたに  
 海徳佛起世の末形に  
 守一尊能学運名  
 亦も地為そん  
 本の抄よりきねん  
 上ふまきり為の意より  
 石川郡治谷郷  
 二七の基よりたのづ

たき及乎縁とけりしこ  
 奥州二列は弘通せし  
 佛で中地とけりおきば  
 吾佛を専夜宗生乃  
 かの格条乃九名  
 たき利生のみられら  
 夫吹氏の子と生  
 佛の道は帰入して  
 十七葉の末乃

同必修を大安の  
 良覺上人師とたの  
 浄土の章疏を習学し  
 亦もけりかくかたわき  
 二十あゆりれ六ツ乃  
 子の夜乃いそそく  
 ころよよむぶ茶の香  
 目よつまかきとひねりて  
 いふりかハは乃園也

茶若ふのづしこのち乃  
 利整潔衣乃為とありて  
 亦くの叢林淨流ひく  
 ともかく名利といひて  
 字を以のづれ山住者  
 まあふのるもはしめ  
 病乃命をたけまひん  
 たきけりやあまぬ  
 なふりのゆもすて

如法に課する珠粒の玉  
 遠くへすてぬ自修の行  
 くらひらるや四方ふてる  
 化徳の機縁も熟して  
 志げふ言座のうへ毎ふ  
 海へ六葉の葉と身と現じ  
 農民樵夫漁父捕師  
 機よ志ごとくふ法の声  
 日課を修めしとらふ者

十萬余の救たれや  
 つめでをこそ志す玉の  
 徳よならんといはれり  
 法よ起くはりの場  
 何れに佛をおとせし  
 幼心の詞に悔やう  
 老年少児のこころも  
 きてるるはつたを  
 十七葉の葉と身と現じ

改依の男女の信水了  
 何れに盲の目を閉た  
 ありは雲と感てし  
 せしはも誂清の若あま  
 佛法守護の法大神  
 邪見滅除ん言たれ  
 かこもも縁なき人の  
 信の芽ごしの生むるハ  
 かじもそふおきて

うはる佛の威光もや  
 又ハ邪見滅除し  
 せしは佛性生じ  
 忽ち罪とやふは  
 疑清のつてたたり  
 折伏門の蓋たらん  
 かく利あるは  
 大悲捨受の志  
 利益よそふ共にかた



ことしは修禊もはさへ  
 ひこらのふかき地氣にて  
 水と物と西は向き  
 病中よかびくの  
 つわふもくれ作乃  
 ころひと十七歳若  
 源禪定より入るごとく  
 どん息つとさせまふ時

享保三年暮るを  
 寒年の夜よやうゆりて  
 陰鏡の儀より入りたまふ  
 掛境瑞雲いちぢくし  
 松よともかふまもまきく  
 四月二日のあけはのふ  
 多らけの声くりたたまふ  
 いかりれ之夜を辰初  
 大形成輪の瑞さくめ  
 河原の悲歎はさきやこの  
 雪がくれあしむしとも  
 河原道と今ふつらう  
 松野氏か愛し入り  
 地蔵ありよのどん告  
 源秘の鏡よ并合して  
 亦せとさく改革の  
 金利と現しを程うらふ

多よりあひし生れ  
 化よあけりしをこの  
 霧の林の秋も若月  
 かへやとおひあはさして  
 ともも滅後のつる夜ふ  
 月夜も振糸と品乃  
 蓮華三昧密経お  
 不可思議なり利重  
 闇維も唐よりいろくの

大形成輪の瑞さくめ  
 河原の悲歎はさきやこの  
 雪がくれあしむしとも  
 河原道と今ふつらう  
 松野氏か愛し入り  
 地蔵ありよのどん告  
 源秘の鏡よ并合して  
 亦せとさく改革の  
 金利と現しを程うらふ

西紀の伝とぞ傳ふま  
廣の志砂の切すくま  
筆の林くうのそま  
師乃一代の化跡をバ  
舟よ奇特乃教のまよ  
くくくくくくくくく  
高師の化夜まあゆそ  
本地上品地秀る  
日課念佛同行人

その品くのかんとく  
現乃海をほくはく  
くくくくくくくくく  
かぶ抄くも生まわひ  
生死と経統をるあくよ  
高迹日域学運師  
師意伝たまうあうざん

南無阿彌陀佛

祖闕不能上人速作

とく阿くけちわいあ  
ちく天地をと勅く鬼神  
も感せむ  
留物徳のくさくあ  
乃頃くちれ國忠直  
生の事蹟も佛の  
おく乃くこころり  
を志す人ハいと  
阿くくもくたを  
紀えり思あめ  
おくもくもくま  
てけりさるを  
はえこく  
臨へる人これら  
き料けうきたる  
るに  
あてあくき  
のあとさく  
うに志る

西紀傳

の一家を孝感冥祥録てふこいさきに様  
 にあつて盡く流布し傳ふる人の知ら  
 不なり志の一家小令世感得傳を辭かさ  
 乃所く小生ありさまを籍のりるふく故  
 何や一のほこれゆより求いぬしたるを  
 のくてもしも推おのま露魚てふ忠乃すこ  
 かしもあり奈んといとほおしやすお流の  
 あるまうの女なと孫つのみまふくつ  
 とい乃ゆかちもしらすんはの世者

様を見て釋古故いこが浄土を教ふれたつた  
 ことなるあやハ又素朴の大徳乃かこき  
 らあこハ行業記をき事てふ故らゆて世よ  
 えてもやすめきハ孫文小く小おにる故  
 小もあら孫と此大徳乃おりせし世に直進  
 乃希有なるためしをめてゆてこく良人  
 故初多いしのみくは直進を孫と婦のく  
 帰依しなれり又家寺に順是上人ハ  
 此大徳の徳故志のいより乃流るり

一六の世を去りあいてはこそつちの  
國より此の藏野に御福被給へり  
給いていと福むし御小志願もこいあま  
におほくたうくまにす人につなかり給もおほ  
御けね縁よ何さるるしはまはり業記  
乃中より其のゆまをさうてし持より  
その感得傳ととも小世に坑布せしめんと  
ほりす家もある由に御阿まはたる金一  
て明二寅れを厭使沙門補正の连接給へり

法然上人遠流記

此書は法然上人の傳記に  
よるとありしを  
せし全部二冊

菩提心集

全部  
三冊

一切經惠林音義 全部百冊 合本五十冊

淨土禮誦法

此書は淨土宗の勅式に附礼後二法  
を記し又其の  
又日用念誦と云

全部二卷

折經

同日用裸禰

古の日用書を  
あつめたる書なり

全部一卷

折經

同六時禮讚

此書は華嚴經の  
六時禮讚

全部一卷

折經

雜華法用

此書は法苑珠林の  
法苑珠林とありしを  
折經

全部一卷

慈雲和上述  
放生會儀軌

竹書のほろるとのりあたる

全部一卷  
折経

四箇法用

右大原声明書

在家勤行式同断

墨書

弥陀如來和讚一卷  
圓光大師和讚一卷

無能いふは和讚一卷  
來迎和讚一卷

引声弥陀經 一卷  
廿五菩薩之圖一卷

小松谷慈雲和上述  
菩薩戒經 全一卷

孟蘭盆經 同圓通寺板  
同抄りくみ付 同献供儀

在り外書物経所取りて是を  
以て用ひ居る自りて下海  
去折りて一巻

御書物所

京洛東知恩院古門前石橋町

澤田吉左衛門



湯鳩村家  
虛其左衛門

